

～ 日清戦争にまつわる歴史秘話「可睡齋活人剣」～

日清戦争終結時の明治 28（1885）年、講和条約締結のため来日した清国全権大臣の李鴻章が暴漢に狙撃される事件が勃発。李の命が失われたり、交渉を打ち切られて帰国されたりしては、我が国にとって正に一大事。

この国難に際し、勅命によって李の治療に当たり見事快癒させたのが、陸軍軍医総監佐藤進医学博士です。その博士の功績を称えとともに、この戦争で亡くなられた日清両国の方々の霊を弔うために建立されたのが、「活人剣」です。



李鴻章
(清国全権大臣)



佐藤進
(第3代順天堂主)



日置黙仙
(第48世可睡齋主)

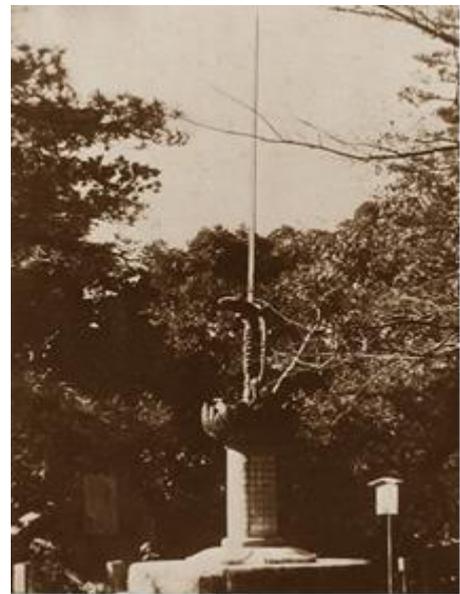
活人剣の由来

佐藤が李を治療中、常に佐藤が帯剣しているのを不思議に思った李が「医者の仕事に剣は不要なのでは」と尋ねたところ、禅の素養のあった佐藤が「これは、活人剣である。」と当意即妙の回答をし、李をいたく感心させました。この「活人剣」の話は、新聞などでも取り上げられ世間の話題となりました。佐藤の禅の師が可睡齋主を務めたことに縁を感じた、当時の第48世日置黙仙齋主は、このことを後世に語り伝えようと可睡齋の境内に剣の建立を発願、全国から賛同者を募って、「活人剣」は明治33年、日清講和記念物としてこの地に完成しました。

創建時は台座・基壇も含め高さは、全高20尺（6メートル）であり、剣の部分は明治を代表する彫刻家の高村光雲が制作しました。しかし、剣部分が金属製だったために太平洋戦争時に供出され、長いこと石造りの基壇のみが残されることとなりました。その結果として、次第に訪れる人も疎らになり、その存在自体が地域から忘れ去られようとしていました。

そのような中、我が国近代化の礎となられた先人達への感謝の思いと、由緒ある歴史遺産を次代に継承することの大切さ、更には日中友好の更なる発展への願いを込めて「活人剣」の再建活動が始まり、平成27（2015）年に竣工しました。

剣は、現代日本における金属工芸界の第一人者、宮田亮平東京藝術大学学長が制作し、山門わきの新たな地に設置され、可睡齋を訪れる多くの方々にその存在を誇っています。



剣の作者は**高村光雲**